

表記形態のソースモニタリングにおけるリスト構成の影響

生駒 忍¹・川崎恵里子²

(¹筑波大学 人間総合科学研究科・²川村学園女子大学 文学部)

key words: ソースモニタリング, リスト構成, 表記形態

近年, 文字表記形態の記憶に関して研究が進みつつあり(例えば, 畑中・藤田, 2003), その特性が明らかにされてきている。しかし, これまでの研究では, 操作される各表記形態は学習リスト中に等しい頻度で配置されるのが常であった。これは実験統制の観点からは理解できるものの, 現実場面での表記形態の使い分けを考えると生態学的妥当性に難がある。通常, 複数種のフォントが等比率で均等配分されることはまずなく, むしろ重要語句や強調したい表現, 見出しや引用部分といった地の文とは異なる部分のみフォントを変えるため, フォント間の比率は偏るし, むしろ示差性を高めるため意図的にそうされているからである。書き手側のそういった操作が読み手側に効果を持つのか実証するためにも, リスト構成に偏りのある事態での記憶を検討することは有意義といえる。

本研究ではそのうち, ソースモニタリングに着目する。再生や再認といった一般的な記憶課題においては, リスト構成比に由来する示差性が記憶成績を高めることが広く知られているが, ソースモニタリング課題については未だ不明である。再認では得られる処理水準効果がソースモニタリングでは認められない(畑中・藤田, 2003)ように, リスト構成の偏りの効果についても一般的な記憶課題とは異なるパターンが得られる可能性がある。リスト構成比は記憶実験の大半に関わりうる要因であり, また奇異性効果や交差プライミングといった今なお解明が不十分な記憶現象と関連を持つことから, 記憶の基礎研究への広い示唆が期待できる検討対象といえる。

そこで本研究では, 文字表記形態に対するソースモニタリング判断において, 学習リスト構成の影響を検討する。ソースモニタリングの対象となるフォントの使用比率を7:3とし, 比率の高い(リスト中での示差性が低い)フォントと比率の低い(示差性が高い)フォントとでの比較を行う。

方 法

実験参加者: 大学生 19名。全て女性であった。

刺激: 刺激語として, 中尾・宮谷(2004)の特性語 60語をひらがな表記のまま用いた。学習課題では楷書体(有澤楷書)とくずし字(S2Gつきフォント太字)との2種類のフォントを用いて, テスト課題では全てMS明朝で表記された。

手続き: 実験は学習課題とテスト課題, およびその間に挿入された1分間の干渉課題(都道府県名の自由放出)からなっていた。

[学習]課題用紙に表記された40語の特性語について, 1語あたり5sのペースで単語の明るさ評定を5件法で行わせた。1ページにつき20語が記され, それぞれのうち14語(7割)が低示差条件, 6語(3割)が高示差条件に配された。参加者は2群に分けられ, 一方では低示差条件に楷書体・高示差条件にくずし字が用いられ, もう一方ではその逆としてカウンターバランスを取った。

[テスト]60語の特性語について, 学習課題において楷書体で表記されていたか, くずし字だったか, 学習課題では提示されなかったかの三肢択一によるソースモニタリング判断を求めた。全60語は低示差条件28語・高示差条件12語・未学習条件(学習課題で提示されていない特性語)20語から構成され, 1語あたり5sで判断させた。

結 果 と 考 察

3名について課題が適切に施行されていなかったおそれがあったため除外し, 16名分を分析対象とした。

各条件の正答率はFig. 1のようになった。各参加者の正答率に対し逆正弦変換の上で分散分析を行ったところ主効果が有意であり($F(2, 30) = 13.77, p < .01$), 多重比較の結果, 全ての群間に有意差が認められた($p < .05$)。よって, 示差性の効果が認められた。

一方の示差性条件側のフォントへの回答バイアスがあるか検討するため, 未学習語に対して両条件のフォントを誤って回答した率をそれぞれ参加者別に算出した。この誤選択率に対し逆正弦変換の上で対応のあるt検定を行ったところ有意差はなく($t(15) = .01$), そのようなバイアスは認められなかった。したがって, 正答率における示差性の効果はフォントの比率の多寡による回答バイアスの混入に起因するものではないと考えられる。

以上より, 単語の文字表記形態に対するソースモニタリング判断にリスト構成が影響することが示されたといえる。しかし, その効果はリスト中での比率が高く示差性が相対的に低い場合の方がより正確にモニタリングされるという方向に現れており, 再生や再認といった一般的な記憶課題において認められる効果とは正反対となっている。これは, 記憶研究において古くから知られている示差性の効果が必ずしも記憶一般に普遍的な法則として働くものではないことを意味している。今後, この特異な効果の性質を詳細に検討していくことで, 記憶における示差性の機能に関して再考を促したり, ソース記憶の機構の解明に寄与したりすることが期待できよう。

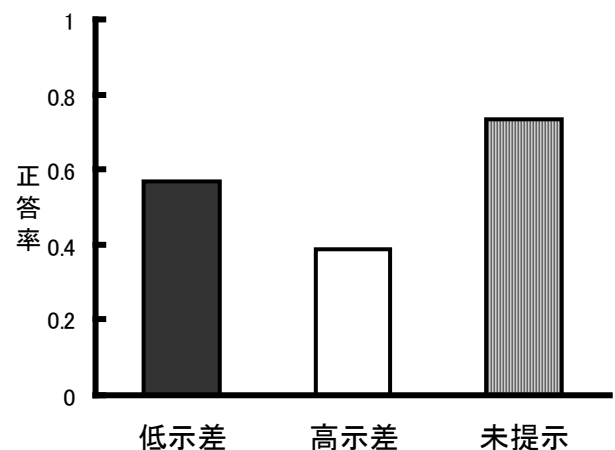


Figure 1 各条件の正答率

引 用 文 献

畑中佳子・藤田哲也 (2003). 心研, 74, 496-503.
中尾敬・宮谷真人 (2004). 広大心研, 4, 11-17.

(IKOMA Shinobu & KAWASAKI Eriko)